

今号の主な内容

- はじめまして「杉並ぐるる」と申します 1面
- キックオフで「研修会」開催 1面2面
- 杉並区の目指す生活支援体制整備 3面
- 生活支援サービス活動団体の紹介
NPO法人「おでかけサービス杉並」 4面

杉並ぐるる

つなぐ ささえる ひろがる

2016年8月発行

vol. 1

はじめまして 「杉並ぐるる」と申します — 連携と情報共有へ —

団塊の世代が75歳以上となる2025年はさほど遠くない未来となりました。介護リスクの高い後期高齢者人口が増加する一方、生産年齢人口が減少し、支援を必要とする人と支え手となる人のギャップは益々大きくなります。安心して住み続けられる地域を目指した「地域包括ケアシステム」を構築するうえでも、ちょっとした困りごとや地域からの孤立などに対し、制度的なサービスである医療や介護保険だけでなく、地域の支え合いによる生活支援サービスへの期待が大きくなっています。

国は平成27年4月に介護保険法を改正し、生活支援サービスの充実や地域における支え合いの体制づくりを推進するための「生活支援体制整備事業」を地域支援事業として新たに

位置づけました。

そうした中、杉並区では生活支援サービスの効果的な展開へ向けたサービス提供団体の連携、ネットワーク化への取り組みが始まっています。その取り組みやサービス提供団体などについての様々な情報を発信しようと、生活支援体制整備通信「杉並ぐるる」を創刊することになりました。「杉並ぐるる」は、生活支援サービスからイメージできるワード、「つなぐ」「ささえる」「ひろがる」の語尾をつなげた造語です。「ぐるる」が生活支援サービス関係団体を「つなげ」、時には「ささえ」となり、杉並区全域の生活支援サービスの輪が「広がる」ことを期待しています。



キックオフで「研修会」開催

杉並区は、これまで区内20か所にある地域包括支援センター（ケア24）で生活支援体制整備に取り組んできました。介護保険制度の改正に伴い、さらにその整備を促進する準備段階として、平成27年度は、家事援助や外出支援、居場所づくりなど様々な生活支援サービスを提供しているNPO法人や公益法人、民間企業などのネットワークづくりに取り組みました。

平成28年度は、取り組みをさらに進めるため、これらの団体や地域活動者などによる「生活支援体制整備連絡協議会」（以下「連絡協議会」という）を協議体として設置し7月26日に第1回を開催、それに先立ちキックオフとして6月3日に「生活支援体制整備研修会」が開かれました。本号ではまず、研修会についてレポートします（連絡協議会については第2号で取り上げる予定）。



▲研修会参加者

「助け合う地域づくり」を進める活動を —和田敏明・ルーテル学院大学名誉教授

研修会は荻窪5丁目の杉並保健所で、連絡協議会委員やケア24で生活支援体制整備を担当する地域包括ケア推進員ら約40人が参加して開かれました。ルーテル学院大学名誉教授(コミュニティ人材育成センター所長)の和田敏明さんと、八王子市シルバーふらっと相談室館ヶ丘室長の今泉靖徳さんが講演しました。

和田さんは「最後まで杉並区で暮らせる地域づくりのために」と題して、生活支援体制整備の具体的な内容について解説。この中で和田さんは、生活支援体制を構築していく上で重要な役割を担う「生活支援コーディネーター・協議体」が持つべき視点として、「生活支援サービスは(介護保険などの)制度的サービスの不十分さを単に補完するものではない」「制度的サービスでは対応できない、あるいはなじまないサービスの提供や、住民が助け合い・支え合いで行ってきたサービスや活動をより組織化し、制度的サービスと協働して互いに補い合う『助け合う地域づくり』を進める活動ととらえるべきだ」などと指摘しました。



▲和田敏明氏

学生らの力を活用 —今泉靖徳・八王子市シルバー ふらっと相談室館ヶ丘室長

今泉さんは、八王子市が館ヶ丘団地に開設した高齢者向け「ふらっと相談室」と「ふらっとカフェ」の運営に携わっており、その活動について具体的に紹介しました。今泉さんが直面したのは活動を展開するうえで不可欠なマンパワーの不足と住民の認知度の低さでした。今泉さんの地域課題へのアプローチは、マーケティングの手法を取り入れた地域分析とユニークな地域資源の活用、そして住民の立場でじっくりと課題に向き合うことでした。

大きな転機は、平成23年夏に東京都の「高齢者を熱中症等から守る緊急対策事業」を受託したことでした。団地の高齢者を対象に注意喚起の戸別訪問などを行う事業ですが、とても人手が足りません。そこで考えたのは「学生の力を活用できないか」ということ。近隣の大学生・専門学校生らに呼び掛け、約70人のボランティアを集めて戸別訪問を実施しました。併せてアンケート調査も行ったことで、団地住民の実態が把握できたうえ、相談室も知られるようになったと言います。相談室に併設された「ふらっとカフェ」はこうした活動を進めるうちに、住民の仲間づくり、情報提供・収集、ボランティアの活動拠点となりました。以来、館ヶ丘団地では多世代が交流する地域イベントなど、活発な生活支援サービスが展開されています。



▲今泉靖徳氏

「背中を押された」「若者を巻き込みたい」—参加者の感想



研修会の参加者からは「認知症カフェに人が集まらず悩んでいるが、講演を聞いて背中を押された」「勇気をもって、また頑張ろうかなと思った」「活動拠点となっている団地の若い人たちを活動に巻き込んでいきたいと思った」などの感想が出されました。「生活支援体制」の整備は新しい取り組みのため、参加者の多くがイメージを描きにくいようでしたが、二人の講師の話を受けて課題が整理され、目指すべき方向性が共有されました。

◀顔合わせをする連絡協議会の委員

杉並区の目指す生活支援体制整備

支援が必要になっても、これまでの地域の人間関係を継続し、自分らしく生活していくためには、地域に根付いた生活支援サービス(地域の支え合いによる支援)と介護保険サービス(介護専門職による支援)をバランス良く利用することが有効です。今後、生活支援サービスの効果的な展開のためには、サービスを提供する団体間のネットワー

ク、そしてサービスを必要とする人とサービスのマッチングが重要です。

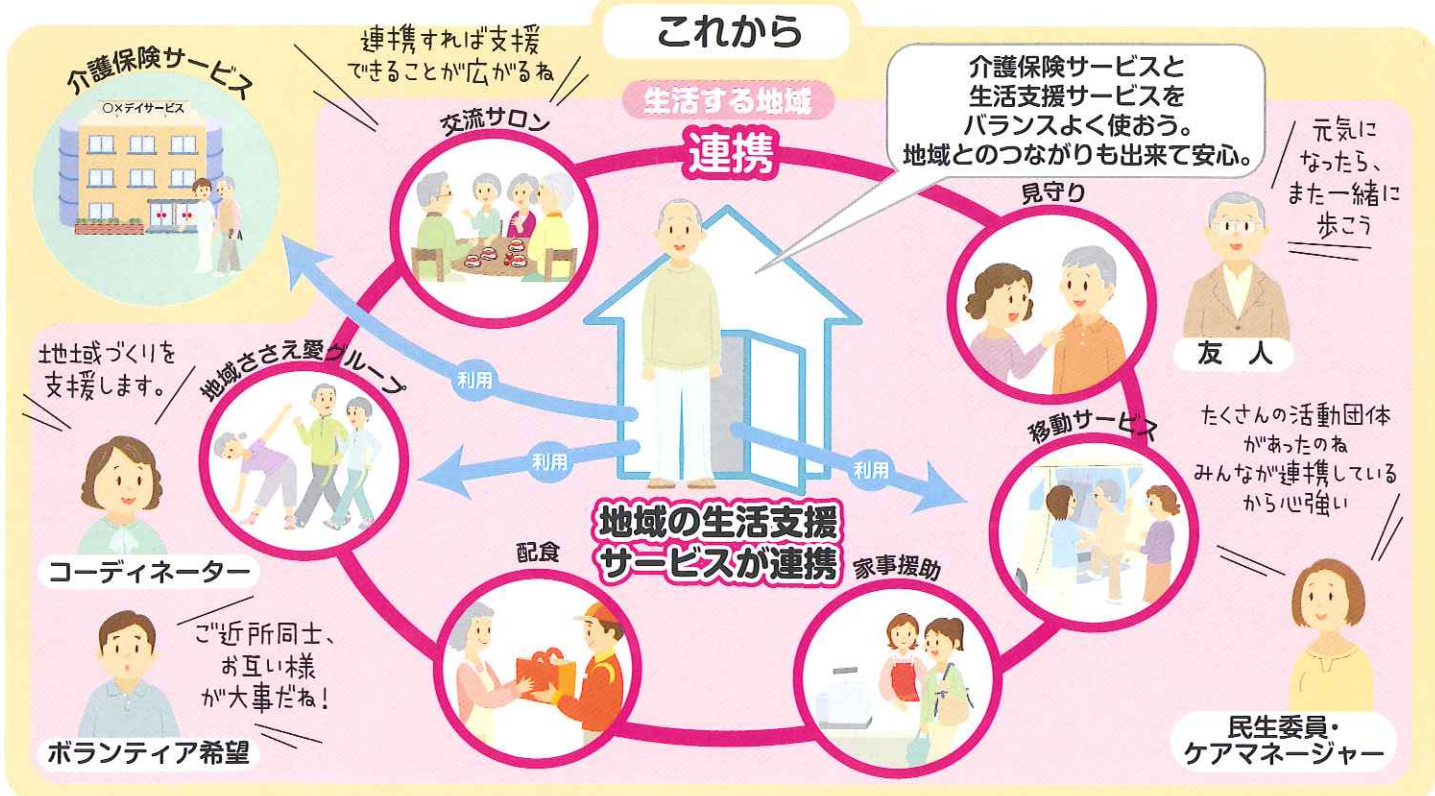
杉並区では、既に多くの活動が始まっている生活支援サービスに係る様々な団体などと連携し、地域ぐるみで生活支援体制整備を進めていきます。

イメージ図

現在



これから



安心な地域の暮らしを支える—NPO法人「おでかけサービス杉並」

杉並区には、生活支援サービスを提供する様々な団体が数多くあり、地域の支え手として活躍されています。「ぐる」では団体の紹介を通し、団体間の連携や新たな支援者など、地域の仲間を広げるお手伝いをしたいと考えています。初回はNPO法人「おでかけサービス杉並」(以降『おでかけサービス』)をご紹介します。

生活に必要なサービスを 自分たちで作り出す

『おでかけサービス』は2005年に活動を始めたNPO法人で、外出が困難な人を対象に行政の制度が行き届かない外出支援をサポートしています。病院の入退院や通院、買い物、イベントなど目的や行き先は自由。「高齢になっても障害があっても、行きたい時に行きたい所に行ける…それは人が生きるうえでの基本的な権利」というのが基本理念。理事長の樋口蓉子さんは「車で目的地に行くだけでなく、運転手さんとの会話、訪問先での出会いなど、素敵な外出を応援する移動支援」と言います。

「地域住民が安心して暮らすためには行政や民間が提供する公的なサービスだけでなく、暮らしている私たちにも何かできるはず」と樋口さん。住民相互の支え合い、助け合いの必要性を指摘します。ちなみに移動サービスの運転手さんの多くは退職サラリーマン。皆さん「地域の役に立ちたい」と安全運転に努めているとか。「世の男性たちの定年後の役割づくり」という『おでかけサービス』発足時のメンバーの想いが実現しています。

けやきの
見える家



おでかけサービスのメンバー

広がる地域密着型のサービス

『おでかけサービス』は車による移動サービス事業だけでなく、2つのゆうゆう館(旧敬老会館)や『杉並区外出支援相談センター もび〜』など杉並区の施設運営管理や事業を受託しているほか、『NEKO(ネコ)の手サポート』『けやきの見える家』といった事業も展開しています。『NEKO(ネコ)の手サポート』は買い物・外出などの付き添い、部屋の片づけや掃除などのサービス、『けやきの見える家』は西荻北4丁目の個人宅を開放した多世代交流の場です。



車椅子に乗ったまま...

これらの地域密着型の生活支援サービスは移動サービスと同時並行して計画されたものではありません。移動サービスを起点に利用者一人ひとりと丁寧に向き合っていく中で、地域に必要なとされているサービスが生まれ、仲間の数とともに自然に広がっていったものです。

自分たちが楽しみ、地域に見えるように

自ら現場のサポート役として活動している樋口さん。「自分たちがこの地域で生きていくために、自らが地域を作っていくという発想を広げていきたい」とこれからの活動への思いを語り、「私たち自身が楽しみながら、人の関係性を広げ、地域づくりにつながるような活動をしていきたい」と締めくくりました。